



編集長のサロン室 ～クスノキ山の会のこと～



宗形政誼

船橋退職教職員の会にクスノキ山の会がある。年に2回実施している。2007年の秋から始まった。これまで登った主な山は、茶臼岳&南月山・黒檜山・黒斑山&籠ノ登山&水ノ登山・日光白根山・至仏山・万二郎岳&万三郎岳・掃部ヶ岳・帝釈山&田代山・安達太良山・瑞牆山・谷川岳・四阿山&根子岳・磐梯山・横手山・明神ガ岳&明星ガ岳・三本槍・荒船山である。

クスノキ山の会の魅力

年に2回（春と秋）1泊の山行をもう10年続けている。参加者は毎回20名前後である。マイクロボスをチャーターして津田沼を出発し、津田沼に戻って来る。山行前に実行委員会を1回開き、いつ、どこかの山へ行くかを決める。温泉宿、宴会ができる宿に泊まるという条件があるので、その要件を満たす山行を計画するのも大変である。

リーダー夫妻が毎回下見をして安全登山を心掛ける。参加者は普段登山をしているというわけではない。この会だけの登山者もいる。山頂まで辿り着け

ない人もいる。

宴会では一人一人が輪番で話したいことを話す。前もって話したいことを考えてくる人もいる。歌が出ることもある。2時間半の宴会でも時間が足りない。話し足りなかった人は帰りのバスで話す。帰りのバスの中では「クスノキ山の会歌集」が配られ、歌声が響く。

山行後「山行記」の文集がカラー写真入りで発行される。その文集の中から、この会の魅力を語っているものを抜粋して紹介したい。

「今回の山の会でも、皆さんがそれぞれの力を惜しみなく発揮されていました。そのことの心地よさに、36時間身を委ねました。クスノキ山の会「山行」には山行だけでなく、「人行」とでもいってべき領域があつて、それがなかなか深いのです」。

「那須岳山行前夜にして、あることで、侃侃諤諤、2時間、3時間と論議出来るこの年老いた仲間達は一切何者なのでしょうか」。

「可憐な植物を見つけ、『うれしい、本物に出会えた！図鑑でしか見たことがなかったのよ』と感動されていたOさん。虫を見つけては、真剣なまなざし

でカメラのファインダーを覗きこむYさん。そんな方たちに刺激を受けながら、私も三つほど植物の名前を覚えた」。

「皆さんと行動を共にすることは、私の心の中に色々な刺激を与えてくれる。皆さんの人柄や生き方から学ぶことがたくさんある。山の会に参加するごとにその空気感になじんでき、次回もぜひ参加したいと思うようになっていく」。

クスノキ山の会の 人たちのこと

山行記をめくりながら、参加者のことを書いてみたい。

「山行記は私の希望の本だと、改めて感じました」。「山が一番なのですが、写真文集と温泉と宴会と歌、みんなセットでクスノキ山の会です。





一つでも欠けると寂しい感じがします。なんとという贅沢な気持ちが育ってしまったのでしよう」。

Mさんが「クスノキ学級校外学習」と題してこう書いている。「4月に入学したばかりの私は、この日が来るのを心待ちしていました。…このメンバーもいい。友だちの操ちゃんはんばっている。『自分は体力がなくて遅くなっちゃうからいつも先頭の次に歩かせてもらっているの』と言っていたが、その割には段差のある山道も何ということなくクリアしている。山岡みやちゃんは膝が痛くて、膝をかばいながらも弱音を吐かずに懸命に歩いている。人間って好きなことや価値あることはがんばれるんだな。深井千恵子ちゃんとは初めて話したけど、東海道や中山道を歩くなんですごい。素敵だな。岡野京くん、宗形政諠くんや又木真理ちゃんはいいつも後方や最後尾にいてメンバー全員を見守る目が優しかった」。



花に詳しい人たちがいる。「最近、記憶力が落ちて、何度耳にしても覚えられない花の名前が、又木真理さん、石原さん、三登さんから、花の名人達が、花との出会いの度に教えてくれたことが、山の魅力を広げてくれた」。虫博士もいる。「山の楽しみ方はさまざま。山崎さんについて歩くと、なにかしら虫の知識が増えて楽しい」。みんな虫を見つげると、山崎さんに声をかける。中にはありふれた虫の場合もある。でも、山崎さんはそんなことは口にせず、珍しい虫に出会えたような顔をして、喜々として虫の写真を撮る。

みんないい文章を書く。表現力・描写力がすばらしい。緑色に関してこんな文章がある。「緑色、薄緑、黄緑、萌葱色、深緑、鶯色、みどり。バスは木々の間を走り抜け、どこまでも、緑の森林に分け入るように進む」。「鮮やかな黄緑色の葉が風に揺れる。そ



の葉が重なり合い、交じり合うように光を受ける。重なっていない葉は、黄緑色が青空に透けて見える。葉が互いに結び合っているように見えることから結葉という。いつかどこかで耳にしたその俳句の季節がふと浮かんだ。今見ているこの光景、『クスノキ山の会』のようだといろいろしくなり、飽きることなくもみじの葉に見入っていた。「今でも、裁ちそばと言う。その言葉を、使い続けてきたのだ。営み、文化の深さ、確かさ、そして、そこに住む人々の誇りのようなものを感じる。桧枝岐には、そんなことから感じる心地よさがあった。一流の田舎だった」。

この山の会はリーダーの又木夫妻あつてのものとも誰もが思っている。「夕飯が楽しみだった。下見をされた又木さんが『宿の食事がいい！値段を考えたら、驚くほどだよ』と、自慢げに言われたからだ。彼は、下見の結果を話してくれるとき、うれしそうに、自慢げに言われたり、自分のことのように、本当に申し訳なさそうに話してくれたりする。このツアーの仲間への思いの深さと、彼の人柄を感じる。このツアーが続く秘密かもしれない」。

「私にとって、この会での楽しみは、虫や花に出会

うことですが、もう一つ、参加者の方々のお話を聞くことです。お話を伺いながら、心が開かれたというのでしょうか、自分がとても素直な気持ちになっていることに気づきました。『山の会』はいい会だなあと思いました」。

宴会での一人一人のスピーチはこの会の楽しみでもある。特に話すことがないと言いながら、話し出すと長くなる人は一人や二人ではない。進行役が宴会の限られた時間のことを考えて、もう少し短くしてほしいと思っているが、みんな無視して長々と話す。長くても誰も文句は言わない。いい話だからである。



この会の楽しみは他にもある。「陽だまりの紅葉



の林を見つけて昼食が始まる。今日の昼食は宿で作っていたおにぎりに2個と寂しい昼食になると思いきや、次々と出てくる皆様からのおいしいもののオンパレード、お米だけのおにぎりと

マツチして大変豊かな昼食となり皆様に大感謝です。聞くところによるとI氏は早朝からリンゴの皮むきをされ、重たいのに持参して食後のフルーツとして配ってくれたとのことにはびっくり仰天です」。

人のために…こんなこともあった。登山の日、夕方まで雨が降っていて道がぬかるんでいた。そのため靴底は汚れていた。下山時沢の水で洗ったりしたが、マイクロボスを汚しては悪いと、Tさんはバスのホウキを借りて、乗車前に、一人一人、足をあげて、と言って、靴底の汚れを払ってくれた。

みんながみんなに感謝する。「この美しさを全員で楽しめたことがさらに嬉しい。ちょっとした声掛けやおやつ一つにも皆さんのあたたかさを感じ、お陰様で充分にリフレッシュできた山行でした。皆さんに感謝いたします。ありがとうございました」。

